

はアツィ族のことであるという指摘である。この機会を利用して、訂正と補足を行っておきたい。また大野氏の好意に感謝の意を表したい。そしてこのような批判が学界において活発になることを私は希望している。

今後世界世界の諸地域から、欧文あるいは他の文明国語で発表されたテキストにもとづく重訳が公けにされる機会は多いであろうし、またそれは必要なこともある。しかし重訳という制約にも拘らず、高い質の

## 『南島歌謡大成』（全五巻）

久しく待望された『南島歌謡大成』全五巻は、沖繩編（下）をもって昭和五十五年八月二十日に先結した。各巻の内容は今さら説明するまでもないが、一言すると、第一巻沖繩篇（上）、第二巻沖繩篇（下）、第三巻宮古篇、第四巻八重山篇、第五巻奄美篇となつてゐる。

資料を提供できるにはどうしたらよいか、を私は問題にしているのである。幸い、近年における我が国の地域研究全般の進展は、戦前には考えられなかったような地域についても多くのすぐれた専門家を輩出させている。そこで、このような専門家に、公刊前に目を通してもらうのも一つの方法であろう。出版社に対しては、このような目的のための期間と経費を今後考慮に入れてもらうことを希望したい。

（おおばやし たりょう・東京大学）

## 狩 俣 恵 一

これは南島を、奄美諸島・沖繩諸島・宮古諸島・八重山諸島の四地域に分けて編んだもので、それぞれの地域による歌謡集であることを明示するだけでなく、各諸島の歴史・民俗・言語等の背景から考えても最も妥当な方法であると思われる。

しかも全巻の編集に当たっている外間守善博士は、慎重にもそれぞれの巻の編者に各諸島の出身者を充てているのである。そ

のことは、この『南島歌謡大成』が単なる南島全般を覆う歌謡集であるという性格のものではなく、各諸島に根差した歌謡を、各々の特色を失うことなく収録しようという編者の意図を示すものである。

更に、今一つの特色としてあげられることは、呪詞から叙事へ、そして叙事から叙情が生まれてくるという外間博士の文学史観によって全巻が成り立っていることである。そのため、歌謡集であるにもかかわらず、歌われない呪詞までも包括される結果となっている。

すなわち、歌謡資料集という枠を超えたものとはなっているが、それ故、ウタの発生及び展開ということについても考えさせられる資料集となっているのである。

## 二

さて、各巻の編者・概要を紹介することから始めることにしよう。

第一巻沖繩篇（上） 編者外間守善 玉城正美

沖繩諸島で記録されたオモロ・琉歌以外の呪詞・古謡を収載してある。ミセセル（二〇首）・オタカバ（二〇二首）・ティルググチ（二二首）・マジナイゴト（一首）の

呪詞二四四首、クエーナ(一四九首)・ウムイ(五〇九首)・ティルル(三四首)の歌謡六九二首を収めている。出典文献は『琉球国由来記』『女官御双紙』『久米仲里旧記』『諸問切のろくもいのおもり』『山原の土俗』『民俗』『沖繩民俗』『琉球王朝古謡秘曲の研究』『沖繩諸島の神歌』を始め、総計五七冊の雑誌・著書・論文・個人採録ノート等である。

第二巻沖繩篇(下) 編者外間守善 比嘉実 仲程昌徳

これはいわゆる琉歌集で、出典文献は、『屋嘉比朝寄工四』(一一七首)・『琉歌百控』(六〇二首)・『天理本琉歌集』(八九六首)・『瘡痍歌口説古名歌集文』(一〇一首)・『琉歌大全集』(五一四首)・『古今琉歌集』(二六九九首)・『混効験集』所収の琉歌(七首)・『大島筆記』所収の琉歌(五六首)・『校註琉球戯曲集』所収の琉歌(一四〇首)で、更に参考資料として『琉歌全集』(三〇〇〇首)を収載してある。その他、宜保栄治郎・大城学両氏の採集資料であるウシデーク・エイサーの歌(三一四首)を収めている。これらを総計すると六八四四首にもなる(注八八八六と定形の琉歌はさまざまな曲に合わせて歌われるので、他の歌謡と違

い八八八六を一首として教えた)が、その中には重複歌・類歌多数含まれている。

第三巻宮古篇 編者外間守善 新里幸昭

ニガリ(八首)・マジナイゴト(一首)の呪詞九首、タービ(二八首)・ピヤーン(三四首)・ニリー(二六首)・フサ(二首)・トゥクルフン(三首)・アード(一二首)・クイチャー(四七首)・トーガニシユンカニ(九六首)・念仏歌(二首)の歌謡四四三首が収載されている他、『宮古島旧記』収載の歌謡及び『宮古島の歌』が収められている。

出典文献は、前記『宮古島旧記』『宮古島の歌』の他、主なものは『南島古謡』、『日本庶民生活史料集成』第十九巻)、『宮古島の神歌』『南島』『宮古史伝』等の単行本・雑誌十七冊、個人の採録ノート等である。

第四巻八重山篇 編者外間守善 宮良安彦

カンフチイ(二首)・ニガイフチイ(一二二首)・ジシムヌ(四六首)の呪詞二二〇首、ユングトウ(六九首)・フミシヤギイ(一八首)・ヤータカビ(九首)・アヨー(七八首)・シラバ(一三五首)・ユンタ(二三七首)・節歌(四六首)・トゥパラマ(一六首)・スンカニ(六首)・口説歌謡(三三首)・念

仏歌謡(三四首)・雨乞いの歌(二三首)・豊年祭の歌(三二首)・節祭の歌(七首)・種子取祭の歌(四首)等、総数七三七首の歌謡が収められている。

出典文献は、『八重山島歌節寄書』『八重山古謡』(宮良当壮・宮良長包著)、『八重山古謡』(喜舎場永珣著)、『八重山民謡誌』等を始め五七冊の雑誌・単行本の他、個人採録ノート等である。

第五巻奄美篇 編者外間守善 田畑英勝 亀井勝信

オモリ・クチ・タハブエの呪詞三十九首、古ナガレ歌(二四首)・新ナガレ歌(四五首)・ユングトウ(九十九首)・イェト(四三首)・八月踊り歌(二九〇首)・あしび歌(一六〇二首、注あしび歌に限っては曲節によらず、琉歌を数える方法で数えた)・口説(一八首)・芸謡(九首)・わらべ歌言葉遊び(六八首)・手まり歌(四六首)の歌謡二三〇一首が収められている。

出典文献は、『奄美民謡大観』『奄美民謡註解』、『奄美民謡辞典』『南島古謡』、『日本庶民生活史料集成』第十九巻)等、二七冊の単行本・雑誌、及び池野無風氏の採録ノートがある。

ところで、『南島歌謡大成』を一読して目につくことは、それぞれの諸島の歌謡はその名称こそ異なれ、同一内容・同一の原理によって支えられた詞章が多いということである。例えば第五卷奄美篇の一九四ページ〜一九五ページにかけての「10米ぬナガレ(5) (大島瀬戸内町古仁屋)」を見ると次のように記してある。

10米ぬナガレ(5)

一 きゆらさ おにお  
に いけ このでい  
池を作って

二 いけぬすばなんに  
池の側には  
松を植えて

三 うれいが さなん  
それが下には  
田を開けて

四 ちゆなんか なれ  
七日たつと  
青田になる

五 たなんかなれいば  
十四日(二週間)た  
つと芽立ちもさやか

六 みなんか なれい  
二十一日(三週間)

ばや  
いになりゆり

七 ふえーから ふき  
いば にしまくら  
八 にしから ふきい  
ばや ふえーぬま  
くら

九 ちゆかまれいばや  
いちまんぐく  
二 たかまれいばや  
にまんぐく

二 みかまれいばや  
さんまんぐく

三 ちきやさんちゆや  
みちうれむい

三 とうさんちゆや  
さちうれむい

一方、第四卷八重山篇の一四五ページには、右のナガレと全く同一の内容を持った「55米ぬゆんぐとら(竹富島)」がある。

55米ぬゆんぐとら  
西の田原 東の田原  
原踏んだり蹴んたり  
作たる米や 北風ぬすびば

たてば  
稲になる

南から風が吹けば  
北の畦を枕にし  
北から風が吹くと  
南の畦を枕にし

一 鎌刈ると  
一万石

二 鎌刈れば  
二万石

三 鎌刈れば  
三万石

近い所の人は  
見てうらやみ  
遠い所の人は  
聞いてうらやむ

西の田原 東の田原  
を踏みつけ蹴りつけ  
て作った米は 北風  
がそよげば 南の畦  
を枕にして 南風ば

し 南風ぬ すび  
ばー 北ぬあぶし  
枕ばし

作たる米や ひと  
うがら 田刈りば  
千俵

ふたがら 田刈りば  
万俵 刈りたる米  
や誰がむん 吾が  
むん

がそよげば 北の畦  
を枕にして

作った米は 一匹田  
を刈ったら千俵

二匹田を刈ったら万  
俵(とれる)刈った  
米は誰のもの 私の  
もの

先の奄美のナガレと、この八重山のユン  
グトウを比較した場合、この両者が(一)田を  
整地すること、(二)南風が吹けば稲穂は北  
へ・北風が吹けば稲穂は南へと揺れる状態、  
(三)わずかの播種でも大量に収穫できた、と  
いう三点から成立していることは明らかであ  
り、大量の米ができたことと歌うことによっ  
て豊作を祈願した歌であることも確認でき  
る。すなわち、言葉こそ違うものの、ほと  
んど同じ内容・同一の原理によって支えら  
れた歌謡であることが知れよう。しかも、  
興味深いことに同様のものが第一卷沖縄篇  
(上)の中にも見られる。二四七ページの  
「62田植象のクエーナ(玉城村百名)」、二  
四五ページの「59(豊作祈願のクエーナ)  
(玉城村百名)」、二四六ページの「60あまへ

1だの歌(玉城村百名)」、三二二ページの「137ウエタヌウタ(玉城村百名)」などがそうである。ここでは紙幅の関係上あげることはできないが、右のクエーナにはアマミタが田植えを始めたことが歌われ、先のナガレやユングトウよりも詳細な歌い方となつてはいるものの、全体としては先に述べた(一)(二)の内容・原理を持った歌謡であることは疑いない。

すなわち、奄美諸島の「米ぬナガレ」と八重山諸島の「米ぬユングトウ」、更には沖縄諸島の「田植糸のクエーナ」「豊作祈願のクエーナ」「ウエタヌウタ」を比較してみると、我々は、それぞれの諸島に分布する「ナガレ」「ユングトウ」「クエーナ」が全然別のもではなく、なんらかの影響関係のあることを予測できるのである。

同様な比較検討は、八重山のユングトウと奄美のユングトウとの関連についても可能であるが、それについては以前に述べたことがある(拙稿『奄美諸島と八重山諸島のユングトウをめぐって』沖縄文化51号)ので、ここでは触れないことにする。

このようなことは、これまで資料収集がそれぞれの諸島で別個に行なわれてきた南島研究の中では、ほとんど不可能なこと

であった。しかし、この『南島歌謡大成』の完結によって、今後各諸島間の比較研究は更に進歩することと思われる。

#### 四

既に外間博士も注目され、第四卷八重山篇の解説でも述べておられることであるが、呪詞と歌謡との間には密接な関係がある。

先に述べた「米のナガレ」「米ぬユングトウ」の歌謡の詞章も、単に歌謡の中だけに見い出されるものでなく、呪詞群の中にも認められる。

第一卷沖縄篇(上)の「9柴差の時あむがなし屋敷の庭にて、みせせる(伊平屋島)」  
「51伊是名のろくもい火神の御前にてのだて言(伊平屋島)」  
「82右同時(雨乞の時)伊是名のろ火神御前へのだて事(伊平屋島伊是名村)」は、それぞれ雨乞いの祈願と共に稲の播種・成育・収穫をその成長過程に従って、丹念に述べ、それによって豊作を齎らそうとする豊作祈願の呪詞であるが、その中にもやはり「あら田けこけぎよとて・そこ田けこけぎよとて」新田をこねて・底田をこねて」とか、「真にしふきすれば・真南風のあづらをちつみ・真南風吹すれば・

真にしあづら打つみ」真北風が吹くと・真南の畔に打ち積み・真南風が吹くと・真北の畔に打ち積み」とか、「あぎのゑららもつもつ・あぎの鎌もつもつ・八つまたに刈満へ・庭まで積あます」秋のゑつら(鎌)を持つ持つ・八つ俣(倉)に刈り満たせて・庭まで積み余す」というような詞章が認められる。

また、第四卷八重山篇のカンフチイ(一九三四ページ)の中にも、「へふうばた、なかばた、くしらいとおり」大島、中島を「拵えなざり」とか、「へやまはかまらぶるんぐと、ゆでまゐる、びきまゐるし、のゝるみり、いりし、かーら、ばいかじぬしーば、にしあじら、まくらし、にしかじぬしーば、ばいあじら、まくらしぬ」山赤まらー牛の尾のように、たれまがり、引きまがりして、稔り、実入りしたならば、南風が吹いたら、北畦を枕にし、北風が吹いたら、南畔を枕にする」とか、「へきた、んにまでん、てんで、あまらし、かーら、なびにいゐるば、なびふてん、かみにいゐるば、かみふてん」桁、棟までも積み満ち余らせたなら、鍋に入れたら鍋の中味が増し、甑に入れたら甑の中味が増す」などの詞章が見受けられる。

これは石垣島川平村で節祭の夜、来訪するマユンガナンという神が述べるカンフチイで、農作物の播種・成育・収穫を順序だてて唱えることによつて豊作を齎らそうとする呪詞であるが、その中にも先にあげたような詞章が認められるのである。

すなわち、外間博士の述べる「呪詞の歌謡化」という問題はさておくとしても、右の諸例によりミゼゼル・オタカベ・カンフチイなどの呪詞とナガレ・クエーナ・ユングトツなどの歌謡との間には、なんらかの關係があつたことは認めざるを得ないのである。

今後、このような呪詞と歌謡という異なつたジャンルの比較研究も更に進むことであらう。

## 五

しかし、やや不満がないわけではない。これは従来の歌謡集にも言えることではあるが、「歌謡の歌われた場」及び「伝承者の心意」が読者にいきいきと伝わつてこないことである。殊に、いわゆる物語歌謡といわれる歌謡群において、そのことが意識されるのは私一人であらうか。

物語歌謡には、「豆が花」「仲筋ぬヌベマ

節」「大浜たなじゃらへンタ」等それ自体が物語歌謡となつてゐるもの、及び「鷲ぬ鳥節」「枕くら」等のようにその歌謡に説話がついてゐるもの二種類がある。そのいづれにしても、我々が調査に出かけたとき、南島においては何らかの説話が付随した歌謡に出合うことが多い。もしそれらの説話も一緒に記されていたら、より具体的にその歌謡がいきいきと読者の前に浮かび上がつてきたらうと思われる。

例えば、「大浜たなじゃらへンタ」には次のような説話が付随する。

ええ昔、石垣島ぬ大浜な、大浜タナジャラていあんじゆ居つたと。うぬ人ぬどうめ、なら刀自ゆさるんていしつすが、全然ならな、当たる刀自やみつきらなつたと。あいすが、子守達の言葉などう、「わー刀自や竹富などう居る」つていあんじゆと。タナジャラやうりゆ聞きつてい、板舟出さし竹富島な一行つかさーい、まー竹富島ぬ花城村な、でーじつてい美しいさる乙女ぬ居り、「ばー刀自なるんだー」つてい聞くつかさーい、「なるん」ていあんじゆと。あいた、タナジャラーや嬉さしー、うぬ親い頼い、なら刀自

つていさーるくとなりつたつと。あいてい、うぬ刀自ぬばいだーていどら、バイヤーピーゆいつたつと。

大浜人やくぬ前までい、竹富島ぬ東たぬバイヤーピーな漁しーな来たんゆー。

〔訳〕

ええ昔、石垣島の大浜村に、大浜タナジャラという男がいた。その男は、自分の嫁を探そうとしていたが、自分に合う嫁は全く見つからない。ところが、子守達が、「貴方の嫁は竹富島にいますよ」といったそうです。タナジャラはそれを聞いて板舟を出し、竹富島へ行つてみたところ、本当に竹富島の花城村に、たいそう美しい乙女がいた。「僕の嫁になるかい」と聞いたところ、「なりません」と答えてくれた。それで、タナジャラは嬉しく思い、彼女の両親にお願いして彼女を嫁にすることができたそうだ。そのときに、この嫁の財産としてバイヤーピーをタナジャラは貰うことになつたという。大浜の人々はこの間まで、竹富島の東方のバイヤーピーに漁にきていましたよ。

もし右の説話を読んだ上で、第五卷八重

山篇四三〇ページの「則大浜たなじやらへゆんた」を見るならば、我々の前に浮かぶ「大浜たなじやらへユンタ」はかなり違ったものになってくるにちがいない。そこには、はっきりとこの歌謡を歌った伝承者の心意が浮かびあがってくるからである。

しかも、このように説話をもった歌謡は、本土ではほとんど収集できないという現状を考えた場合、南島において、いまだ『古事記』の世界のような歌謡伝承が行なわれていることの重要性を思い知らされるのである。

ともあれ、この『南島歌謡大成』を携えて、我々はより幅広い角度からの調査に出かけなければならないという気がするのである。

## 六

これまで述べてきた中で触れていないものに宮古諸島の歌謡がある。これは他の三諸島と比べかなり特異な内容の歌謡を含んでいる。外間博士は既にそのことに注目され、新里幸昭氏などと共に一九六四年から宮古諸島の神歌の調査を行ない、一九七二年『宮古島の神歌』を発刊している。

その辺りの事情は、第三卷宮古篇の解

説・あとがき等で述べられているのでここでは触れないが、宮古諸島の歌謡で最も注目されるべきものは、「狩俣祖神のニーリ」「かでのりのニーリ」「金志川金盛がアヤゴ」「仲宗根豊見親八重山入りの時のあやご」等の長編叙事歌謡であろう。

これらは、他の三諸島にはほとんど見られないものであり、実に宮古諸島はこのような長編叙事歌謡の宝庫である。

このニーリ及びアグには、狩俣のユマサズ、与那覇勢頭豊見親、仲宗根豊見親等の英雄が登場し、これら社会的英雄達の事績を讃える歌謡が中心となっている。この意味においても、宮古諸島の長編叙事歌謡は、日本文学史の中で数少ない長編の叙事歌謡を豊かに持っているところといえよう。

さらに、呪詞の方においても、一人称で唱えられる「被い声」「ヤーキヤー声」等、他の諸島と異なり、神が自らから宣る形式の呪詞を残している。

※ ※ ※

以上、『南島歌謡大成』に対する私見を述べてきたが、この歌謡集によって南島研究が更に前進するものと期待する。

(かりまた けいいち 國學院大学大学院)